

過去の経験と地方移住の意図との関連

— web調査および鹿児島県西之表市での調査の分析 —



DZ17241 長谷川 聡一

Keywords

地方移住 経験 価値観
移住希望者

1. 研究の背景と目的

我が国では人口減少や少子高齢化の影響を受け、持続して行くことが困難な地域が多くみられる。このような問題に対して、農山村地域では、UIJターンや二地域居住に対する支援、農山村留学などの移住促進の取り組みが盛んに行われており、自然に囲まれた暮らしができる地方移住への関心が徐々に高まっている²⁾。さらに、新型コロナウイルス感染症の大規模な流行で都心部などの過密地域での暮らしにリスクがあることが明らかになったことにより、地方での暮らしの需要が高まることが予想される³⁾。

一方で、農山村地域の自治体を実施している地方移住政策は、移住費用の軽減や就職支援、空き家バンクの整備など、主に移住希望者に向けられたものだが、移住希望者自体を増やすことも地方移住を促進するうえで重要と考える。また、これまでの移住を扱った研究では、移住・定住の決定要因を明らかにし、自治体のあるべき支援策を分析としたもの⁴⁾や、地方移住に関心を持つ層と、経済的に移住が可能な層の両者が持つ地方移住生活のイメージに対する選好パターンの違いを定量分析により明らかにしたもの⁵⁾、Uターン者増加の複数要因とその変遷を分析したもの⁶⁾などの多くの蓄積がある。これらは、地方移住を決めた要因や生活に対する価値観に焦点を当て、これからの移住支援施策に活かすことを目的としたものが多い。一方で、先述のように地方移住をさらに促進するためには、移住希望者に対する支援施策だけでなく、地方移住希望者自体を増やす施策が必要である。そのため、移住希望者となり得る、地方に対して興味を持つ、又は地方に良い印象を持つ人に対する調査・分析が必要であると考えられる。

そこで本研究では、「過去に体験した地方での印象的な経験が、体験者に地方生活に関する価値観を形成させ、移住希望の意図につながる」という仮説(図1)の下、地方移住につながる価値観と人々の過去の経験との関連を分析することで、移住につながる根源的な過去の経験を明らかにし、それを誘発させるような取り組みを提示することを目的とする。

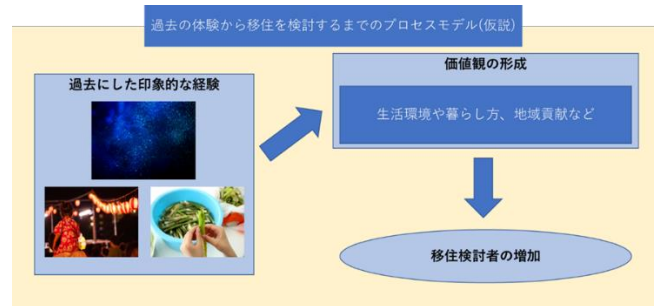


図1 過去の体験から移住を検討するまでのプロセスモデル(仮説)

本研究では、鹿児島県西之表市で移住者への聞き取り調査やアンケート調査を実施した。西之表市は、鹿児島県の有人離島である種子島で唯一の市であり、人口は14,980人(2019年現在)である。人口は1960年をピークに減少しており、65歳以上人口比率は、2015年時点で34.2%と高齢化も進んでいる。産業は農業が中心で、食料自給率は100%を超える。公共交通機関が十分でないことから移動手段として自動車は欠かせない。一方で、離島ながらスーパーマーケットや家電量販店、ドラッグストアなど生活に必要なものが一通りそろうこと、温暖で日本有数のサーフポイントでもあることから、近年多くの移住が行われている。また現在、西之表市では定住促進住宅や空き家バンク制度などの住居のサポートや、子ども医療費助成金や離島地域不妊治療支援事業などの子育てサポート等様々な移住支援施策を行っている。

2. 研究方法

2.1 文献調査

地方移住に関連する知見を得るために複数の文献をレビューした。

2.2 聞き取り調査

地方移住に関するアンケートを作成するにあたって質問内容等を検討するため、2020年7月に西之表市役所の紹介で、移住者5人を対象とした聞き取り調査を行った。

2.3 プリアンケート調査票作成・実施

過去の研究⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾や、聞き取り調査の結果から調査票を作成し、調査票に問題がないかを確認するため、2020

年9月に芝浦工業大学の学生180人を対象としたプレアンケート調査を実施した。

2.4 アンケート調査票の作成・実施

プレアンケート調査の結果を踏まえて、調査票の質問項目、問題形式を修正し、2020年11月にアンケート調査を実施した。調査は、調査会社モニター569人を対象としたwebアンケート調査と鹿児島県西之表市への移住者44人を対象とした紙面アンケート調査を実施した。

webアンケート調査は、移住経験者の価値観や過去の経験等の一般的な傾向を把握するとともに、移住経験者、移住希望者、移住を考えていない者の価値観や過去の経験の違いなどを比較することを目的とした。

西之表市のアンケート調査は、西之表市の移住経験者の価値観や過去の経験を把握し、市への移住希望者を増やすような施策を検討することを目的に実施した。

3. 聞き取り調査およびプレアンケート調査

3.1 聞き取り調査

聞き取り調査では、Iターン者、Uターン者共に、種子島で過去に何らかの経験をしていた。印象に残っている経験としては、「人間関係」「自然体験」「旅行」「食」「遊び」「農業」に関するものが挙げられた。価値観としては、「島に貢献したい」「都会とは違う経験がしたい」「自然の中で過ごしたい」といったものが挙げられた。これらの結果を踏まえ、アンケート調査の質問内容の方向性を決定した。

3.2 プレアンケート調査と調査票の修正

回答者からの改善点の指摘は、「過去の経験について」に対するものがほとんどであり、「ライフスタイルの価値観」について分かりにくい等の指摘はほとんどなかった。指摘された問題やどのように分かりにくかったのかを確認し、調査票の修正を行った。

4. アンケート調査の結果と考察

4.1 webアンケート調査の結果と考察

(1) 過去の経験の有無と時期

表1に示す27項目の経験について、過去の経験の有無と最も印象に残った経験をした時期を尋ねた。分析にあたって、「移住経験者」「移住希望者」「移住を考えていない者」を出身地に基づいて「都市出身」「地方出身」にさらに分類し、属性ごとの比較を行った。

その結果、ほとんどの経験について、「地方出身の移住希望者」が最も未経験が少なく、次いで「地方出身の移住経験者」「都市出身の移住希望者」「都市出身の移住経験者」「地方出身の移住を考えていない者」「都市出身の移住を考えていない者」という順となった。これにより、過去の経験が移住希望と関連する可能性が示唆された。

また、ほとんどの経験について、印象に残った経験をした時期は「20歳未満」であり、成人前にこのような経験をすることが地方移住への意図につながっている可能性があることが分かった。

表1 過去の経験

	経験
1	(野草や野生の果実、きのこなどの) 自然に生ったものを自分で収穫し、食べたこと
2	(魚や貝などの) 魚介類を自分で獲り、食べたこと
3	地場産の新鮮な食材の料理を食べたこと
4	自然の湧水を飲んだこと
5	木登りや草木を用いた遊びをしたこと
6	川での遊び・レジャーを体験したこと
7	海での遊び・レジャーを体験したこと
8	山での遊び・レジャーを体験したこと
9	自然の中でキャンプをしたこと
10	自然の壮大さに圧倒されたこと
11	野菜の栽培などの農作業を体験したこと
12	林業や里山保全などの森林に関する活動に参加したこと
13	自然豊かな景色や音、空気を堪能したこと
14	ゆっくりとした時間の流れを感じたこと
15	(鶏や豚などの) 家畜を飼育したこと
16	(タヌキや鹿などの) 野生動物を身近に見かけたこと
17	満天の星空を見たこと
18	地域の行事(集落のお祭りなど)に参加したこと
19	(踊りや楽器などの) 地域の伝統的な芸能を体験したこと
20	地域の人との繋がりの深さを感じたこと
21	よく知らない人や初対面の人から親切にされたこと
22	同年代だけでなく幅広い世代と交流する機会があったこと
23	近所に住んでいる人が大抵知り合いであったこと
24	全校児童・生徒が100人未満の小・中学校に通ったこと
25	都市部と比べて地方は静かだと感じたこと
26	都市部と比べて地方は物価が低いと感じたこと
27	旅行で農山村地域や離島地域を訪れたこと

(2) 過去の経験の印象

表1の過去の経験の印象を「とても良い印象が残っている」～「良い印象が残っていない」の5段階で尋ねた。

その結果、ほとんどの経験について、「地方出身の移住希望者」が肯定的に回答した割合が多く、次いで「地方出身の移住経験者」「都市出身の移住希望者」「都市出身の移住経験者」「地方出身の移住を考えていない者」「都市出身の移住を考えていない者」という順となった(図2)。このことから、過去の経験についてよい印象が残っているほど、移住希望につながる可能性が示唆された。

また、地方出身の方が、都市出身者よりも良い印象が残っている割合が高いが、その一方で経験によっては地方出身者で良い印象が残っていないと回答する者も一定数いた。例えば、「野菜の栽培などの農作業を体験したこと」や「ゆっくりとした時間の流れを感じたこと」、「野生生物を見かけたこと」、「地域の人との繋がりの深さを感じたこと」、「近所に住んでいる人が大抵知り合いであったこと」等がその例として挙げられる。いわゆる「農業」や「豊かな自然」、「農村部の濃い人間関係」にはメリットだけでなくデメリットもあり、地方出身者はデメリットも認識していると考えられる。

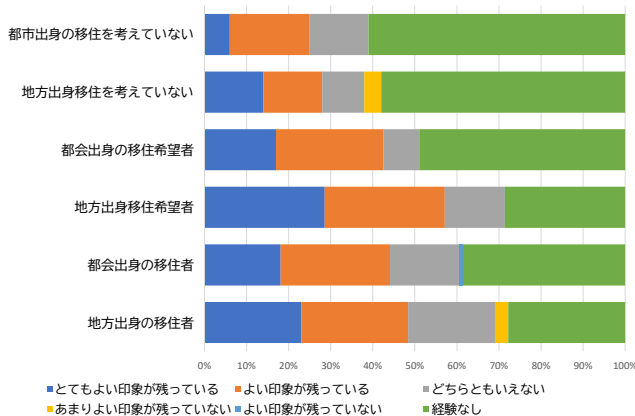


図2 「地域の人のつながりの深さを感じたこと」の印象

(3) ライフスタイルの価値観

表2に示す19項目のライフスタイルの価値観について、「そう思っていた」～「そう思っていなかった」の5段階で尋ねたところ、ほとんどのライフスタイルの価値観について、「移住希望者」が「そう思っていた」「どちらかといえばそう思っていた」と回答した割合が多く、次いで「移住経験者」、「移住を考えていない者」という順となった(図3)。実際に移住を経験した「移住経験者」よりも、移住を経験していない「移住希望者」の方が、肯定的な意見の割合が多い理由は、「移住経験者」が理想のライフスタイルを実現するために積極的に移住した積極的移住者だけでなく、転勤や親の介護など様々な理由でやむを得ず移住した消極的移住者も含むためである。

表2 ライフスタイルの価値観

	価値観
1	広い敷地に住みたい
2	自給自足の暮らしをしたい
3	働き方や暮らし方を変えたい
4	時間に縛られない暮らしをしたい
5	自然の中で暮らしたい
6	都会とは違う余暇の過ごし方をしたい
7	満点の星空を普段から見たい
8	故郷や馴染みのある地域で暮らしたい
9	環境にやさしい暮らしをしたい
10	自分の資格や知識、スキルを活かして暮らしたい
11	静かな環境で暮らしたい
12	自然の景色を普段から見たい
13	自分の子どもには自然の中でのびのびと育てほしい
14	いつでも新鮮な食材を食べたい
15	地域の役に立ちたい
16	新しい土地で新しい人間関係を築きたい
17	地域の文化や伝統を守りたい
18	生活が少々不便でも気にしない
19	お金をかけずに暮らしたい

また、経験に関する質問とは異なり、地方出身者が肯定的な割合が多いライフスタイルもあれば、都市出身者の方が肯定的な割合が多いライフスタイルもあった。例を挙げると、「自分の子どもには自然の中でのびのびと育てほしい」という価値観は、地方出身者の方が肯定

的な割合が高かった。一方で、「広い敷地に住みたい」という価値観は、都市出身者の方が肯定的な割合が高かった。

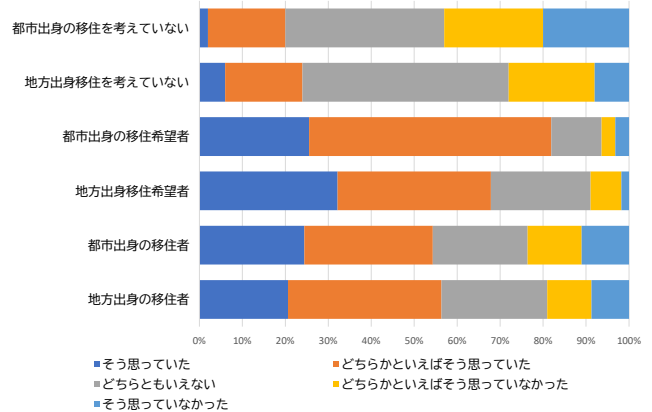


図3 「自然の中で暮らしたい」に対する回答

(4) 地方移住に関する設問

その他、「移住を意識するようになった時期」「移住した時期/移住したい時期」「移住したきっかけ(移住経験者)」「移住に踏み切れない理由(移住希望者)」「移住を考えていない理由(移住を考えていない者)」についても尋ねたが、紙幅の都合上、割愛する。

(5) 経験と価値観のクロス集計

移住を考えていない者よりも移住希望者の方が過去に地方での経験があり、さらにその経験に対して良い印象を持っていた。つまり、過去の経験と地方移住の意図に関連があることが示唆された。また、地方生活のライフスタイルの価値観に対する肯定的な回答も、移住希望者の方が多かった。ただし、経験と価値観の関係性が明確でないため、図1の仮説を完全に証明したとは言えない。そこで、経験と価値観のクロス集計を試みた(表3)。その結果、経験と価値観の間にも関連があることが示唆された。多くの印象的な経験が20歳未満にされていることを踏まえるならば、過去の経験が地方でのライフスタイルの価値観の形成に寄与していると考えるのが妥当である。

表3 価値観「自然の中で暮らしたい」と経験「自然の大きさに圧倒されたこと」のクロス集計

		q2a_10						
		1	2	3	4	5	6	合計
q3a_5	1	66	21	5	2	0	12	106
	2	64	77	13	0	0	29	183
	3	26	54	19	0	0	49	148
	4	15	22	7	0	1	25	70
	5	14	7	2	1	0	29	53
合計		185	181	46	3	1	144	560

4.2 西之表市アンケート調査の結果と考察

(1) 過去の経験の有無と時期

webアンケート調査同様に表1に示す経験の有無と経験した時期を尋ねた。その結果、Uターン者は7割の経験を

20歳未満で経験していた。島と言う環境もあり、「海での遊び・レジャーを体験したこと」の回答がweb調査のものとは比べて経験なしが少なく、20代未満での経験の割合もIターン移住者で特に高くなっている。

(2) 過去の経験の印象

Uターン者は、Iターン移住者に比べて自身で食材を取って食べた経験や地域の行事や人とのつながりと関係する経験に対してポジティブな評価をする傾向が見られた(図4)。

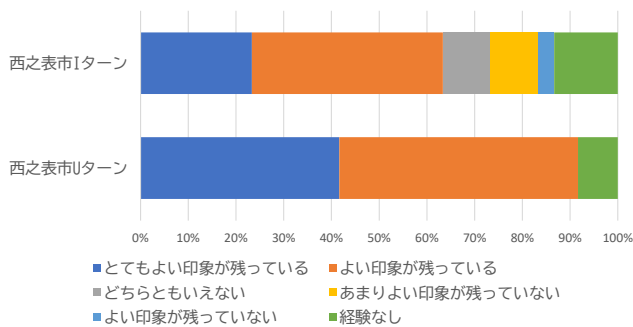


図4 「地域の行事(集落のお祭りなど)に参加したこと」の印象

(3) ライフスタイルの価値観

webアンケート調査同様に表2に示すライフスタイルの価値観について質問した。その結果、Iターン者は、自分のスキルを活かして地域の役に立てたい等の自己実現よりも、都会とは違う環境で過ごしたいという意識の他に西之表市或いは種子島の自然環境を重視しており、「地方らしい暮らしをしたい」という意図が見られた(図5)。一方、Uターン者は、自己実現や地域貢献に対する意識が高い結果となった。

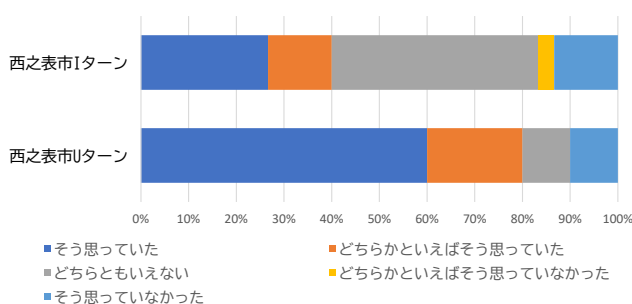


図5 「自分の資格や知識、スキルを活かして暮らしたい」に対する回答

(4) 移住したきっかけ

「移住したきっかけ」では、Iターン者の7割以上が自ら望んで西之表市に移住していたことが分かった。Uターン者も同様に7割がポジティブな理由やきっかけで移住していた。

5. 結論

人口減少や少子高齢化の影響が大きい地方では、積極的な移住政策を行っている。本研究は、過去の経験が地方移住の価値観や意図に影響し、移住希望者を増加させる可能性があるという新たな観点から、西之表市での聞き取り調査やアンケート調査を行うとともに、webアンケート調査を実施した。その結果、webアンケート調査からは、地方暮らしをイメージさせる出来事を経験することで、地方生活の価値観が形成され、移住希望につながる事が明らかになった。また、20歳未満での経験が重要であることも明らかになった。さらに西之表市の調査からは、西之表市への移住者は、Uターン・Iターンともに種子島の自然環境を求めて移住したほか、Uターン者は地域のつながりについても重視していた。

以上から、移住希望者を増加させるためには、幼少期や少年・青年期に都会とは違う地方の環境を体験させ、自然と触れあう機会を提供するような施策の実施が効果的であると考えられる。やがて、その子どもが大人になった際には、地方生活に肯定的な価値観が形成されるとともに、自分の子どもにも同じような体験をさせたいと考えられるようになるためである。

参考文献

- 1)内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局(2017)「移住・定住施策の好事例集(第1弾)」
- 2)内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局(2020)「移住等の増加に向けた広報戦略の立案・実施のための調査事業報告書」
- 3)内閣府(2020)「新型コロナウイルス関せ印象の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」
- 4)梶原綾乃・山本和博・胡柏(2019)地方移住の実態とあるべき支援策、愛媛大学農学部紀要, 64, pp16~26
- 5)佐藤遼、城所哲夫、瀬田史彦(2014)地方への移住関心層と移住可能層との間での地方移住生活イメージに対する選好パターンの違い—移住先地域での暮らし方・働き方の質に関するイメージに着目して—。都市計画論文集, 49-3, pp945-950
- 6)岡崎京子・後藤春彦・山崎義人(2004) Uターン者増加の過程における転入要因の変遷—宮崎県西米良村を事例として—。都市計画論文集, 39-3, pp25-30.
- 7)野崎翔太・遠田敦(2017)Iターン移住者の意識及びライフスタイルに関するアンケート調査。2016年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ, pp403-406
- 8)中村亜希・栗島英明(2011)過去の自然体験が里山保全行動に及ぼす影響。環境情報科学論文集, 25, pp179-184